

の座敷先に有る古松にたよりて、利休其時たづさへたる杖のさきにて、此圍の地割指圖をえて大工へ申付て、出來して用たる座敷と云傳る事也、此座敷は則平三疊と云物也、其三疊の外に八寸五分の板を、相伴衆の居る次の座敷のかべざわへ入て、クツロゲタル意味、旁奥ニ云が如し、猶委くは圖を以知べし。○圖略

一此座敷の趣向心得は、極貴人を奉請て、御正客御一人床前に御座をえめられて、御相伴二三人は、居敷を隔て次の間に着座し給ふて、扱茶を點るは正客の目前にて點るために、敷居の立付に小壁を付て、其隅へ向點本がまへの入爐に切たる物也、此炭櫃の角々を丸く塗廻したる心は、其刻は四方釜を被用たる故と云傳ふる也、

〔長闇堂記〕一我利○久保庭前七尺の堂の起は、東大寺大佛再建の聖俊乗上人の影堂を、中井大和守改かへられし、その古き堂とて面白きものなれば、去人に申請て、前栽の中に移つくりひて茶所に用たり、堂のうちわづかに方七尺、其内に床あり押入あり水屋有て、茶具を取入、床に花掛をして、押入床を持佛堂にかまへて、阿彌陀の木佛を安置し、客に茶湯出せどもせまき事なし、鴨長明は維摩の方丈を學て、隱居り、人に交らざるを樂しみ、只一筋にみだをねがへり、我堂は方丈にたらずといへど、餘多の人を入て茶湯せしなれば、淨名居士の獅子の坐には叶へりとぞ思ふ、何ぞ長明を求めんや、但彌陀の木佛は幸に法乘の古堂なれば、似合しく思て安置すといへども、我更に彌陀を頼んとては、あらず、俊乘は法然の弟子たりといへば、上人の禮義をなせるのみなり、江月和尚江戸にましませし時、此堂いとなみしま、便につき御文奉りし次に、此事をのべて、此阿みだへ狂歌に、

せまけれど相住するぞあみだ佛後の世たのみをくと思ふな、といひしを書付て送りし御返事に、やさしくも詩歌を以て答給へり、